『西南アジア研究』No. 62, 2005

古代ホラズムの「家」と「しもべ」

春　田　晴　郎

はじめに

本稿は，アム・ダリヤ下流域古代ホラズムのトプラク・カラ Toprak-kala[1] 宮殿から出土した紀元後3世紀頃の文書のうち，「家」と「しもべ」に関係する数点のテキストを，若干の考察を交えながら歴史研究者に紹介することを目的とする。これらの文書は，以下の章で述べるように「家」に属する成人男性の登録名簿と推定されるが，既に20年前（1984年）に刊行され，きわめて重要な内容を持つにもかかわらず，あまり注目を集めないまま現在に至っている。そのため，最初になぜこれらのテキストが，とくに日本で，ほとんど知られてこなかったのか，その理由を私なりに推察しておくことから始めよう。

まず第一に，これらの文書が，ロシア語の報告書中で刊行されたことが挙げられる［Лившиц 1984］。しかし，同様の条件にありながらも広く知られる例はもちろん存在するので，これは大きな理由にはならないだろう。

第二に，文書が言語学者にあまり魅力的なものでなかったのではないか，ということである。イラン学のうちイスラーム以前を対象とする研究では，このことの影響は無視できない。テキストは，アラム文字を元にした文字（ホラズム文字）によって，中期イラン語東部方言の一つであるホラズム語（Chorasmian）で記されているが，形態論や統語論に寄与するところは乏しい。ホラズム語の研究は，アラビア文字で記された史料（MacKenzie 1990 など）の方が重要であり，関心が向けられてきた。もちろん，トプラク・カラ文書軽視の責任は，言語学者とは全く関係なく，歴史学者の怠慢に着せられることは言うまでもない。

第三に，「ホラズム」という地域の無名さである。マッソンが述べるように，イスラーム以前のこの地の古代文明について，古代ギリシア・ローマの「著作家たちはどのような知識ももちあわせていなかった。ホレズムという国名そのものも知られていなかった」［マッソン 1970 : 172］。ギリシア・ローマ史料に出てこないことは，「しもべ」あるいは「奴隷」に関心を持つ研究者の多くの注意を惹起しにくいことにつながろう。また，古代ホラズムは

1）　本稿では，遺跡名の日本語表記，ラテン文字転写ともロシア語の表記を基にした。ただし，“ы” はウ段で写す。なお，「ホラズム」そのものについては，ロシア語形ホレズム Хорезм は採用していない。

「他の都市文明の中心から離れて，活発な国際貿易の幹線からはずれたところに位置していた」[マッソン 1970：173]。これは，「シルクロード」研究からも目を向けられにくいことを意味している。

しかし，私は第四の理由，古代の奴隷制に対する関心の薄まり，こそが，この文書がほとんど知られずに来た最大の要因である，と考える。ストルーヴェ流の「奴隷制社会から封建制社会への発展」という図式は，1984年の時点でソ連圏以外では影響力をほとんど失っていたであろう。第二次大戦後このような考え方が広く紹介された日本の史学界も例外ではない。そして，ソ連崩壊はそれに止めをさした。もちろん，こうした「図式」を離れて奴隷を考察しようとする動向は存在したろうが，やはり大きな目で見ると，イスラーム世界の「奴隷軍人」研究を除けば，奴隷に関する研究の比重は低下したと言えるのではないか。日本の歴史学研究会は，1994年度の大会テーマに「歴史における『奴隷包摂社会』」を掲げ，全体会で3本の報告と討論を行なったが，成功したとは言い難い（『歴史学研究』1994年10月号，12月号）。

さらに関連して，第五の理由として，文書の時期の中途半端さ，を挙げておく。紀元後3世紀頃というのは，古代ギリシア都市の最盛期はもちろん，ローマ帝国のいわゆる五賢帝の時代よりも遅い。古代ギリシア・ローマの研究者にとって，自分たちの研究対象より古い「古代オリエント」ならいざ知らず，少し後の時代の東方の「しもべ」「奴隷」を参照しようとは，なかなか思い至らないのではないか。また，逆にイスラーム世界の奴隷と比較しようとするには少し古すぎる，と思われてしまうのだろう。とくに，ソ連時代の研究では，古代の奴隷制社会を止揚して中世の封建制社会が成立するとの立場から，両者の隔絶が強調されることになり，それらの研究を読むソ連圏以外の研究者もその影響から完全に逃れることは難しかったのではないか。

以上のような推察が正鵠を射ているかはわからないが，ともかくもトプラク・カラ文書は，歴史研究者にその存在すらほとんど知られてこなかった。しかし，この文書は，中央ユーラシア史のみならず世界史的にみても無視できない内容を持つと私は確信しており，紹介して識者の見解を仰ぎたい。なお，予め断っておくと，文書から確実に導き出せることはごく僅かであり，後は推察を積み重ねるしかない。しかも，優劣を付け難い幾通りもの仮説が考えられ，結論が全く出せない場合もある。この文書によっても古代ホラズム社会は相変わらず謎のままであるが，それにもかかわらず他の地域の歴史研究にも資するところがある，という例として捉えていただければ幸いである。

Ⅰ　トプラク・カラ出土「『家』所属成人男性名簿」の概要

1　トプラク・カラ宮殿からの文書出土とその刊行

アム・ダリヤ下流域のホラズム地域は，ステップ地帯に張り出した農耕地帯の橋の先のよ

うな位置を占める。そのため，古くから牧畜民と農耕民が相互に影響しあい独特の文化を築いてきた[2)]。

トプラク・カラ都城址は，アム・ダリヤの右岸，ヌクスの南東 150 km に位置する[3)]。だいたい北西－南東方向を長軸とする 500 × 350 m の城壁に囲まれた方形の都城で，西の隅に 80 × 80 m，高さ 15 m ほどの宮殿が，3 つの巨大な塔を伴って聳えていた。そこを含む西隅の 180 × 180 m の部分が内城部で，市街とは壁で隔てられていた。都城の南東側 300 m ほどの部分が市街部である。長軸に平行して中央に大通りが走り，大通りに直交する街路とあわせて，市街を 8 ～ 10 の区画（各々 100 × 40 m）に分ける［マッソン 1970 : 189－191 ; 加藤 1996 : 28－31 ; Rapoport 1996 : 162－163 ; Неразик & Рапопорт 1981］。

都城址は，1938 年以降トルストフ（С. П. Толстов）率いるホレズム考古学民族誌調査隊により発掘調査されてきた。宮殿は 1945－1950 年に発掘され，1967－1972 年の小規模な調査成果を組み込んだ報告書は，1984 年に刊行された［Рапопорт & Неразик 1984］。一方，市街部については街区の一部を発掘する調査が 1965－1975 年になされ，報告書は 1981 年に出ている［Неразик & Рапопорт 1981］。なお都城の外側，宮殿の北西向かいにも宮殿-神殿建築遺構が存在し，1976 年以降，調査されている。さらにこの建築遺構の南西側に接して，だいたい北東-南西方向を長軸とする 1250 × 1000 m の巨大な方形の区域が壁で囲まれていたことが判明している。ただし，この中に遺構は確認されていない［Rapoport 1996 : 162－163, 174－181］。

さて，宮殿発掘の際，その東隅にあたる 89 室，90 室，91 室，93 室計 4 室から皮および木に書かれた文書が出土した。現存していない二階部分に文書庫があり，そこに収められていた文書が崩落したものと推察される［Рапопорт & Неразик 1984 : 173－177 ; 加藤 1996 : 34］。文書については，宮殿の報告書の中でリフシツが報告している。多くは朽ちてしまっていたが，皮に書かれたもの 8 点，皮は朽ちてしまったが粘土上に文字が写されて残っているもの 33 点，木に書かれたもの 25 点（うち 7 点は目盛が刻まれた棒尺 бирка[4)]）が挙げられている。ただし，本稿で扱う木に書かれた名簿のうちの 5 点と棒尺以外は，断片で，とくに粘土上の字は当然のことながら状態が悪く，また棒尺上の字は褪せていて読み取り難い[5)]。内容は，名簿と棒尺以外は，物資の配給などに関する行政経済文書と判断される［Лившиц 1984］。

2） 古代ホラズムの手軽な概説として以下を挙げておく：マッソン 1970 : 171－203 ; トルストーフ 1981 ; 加藤 1996 ; Nerazik & Bulgakov 1996 ; Rapoport 1991. 貨幣については：ルトヴェラーゼ 1999 : 54－55.

3） トプラク・カラについては，注 2 上掲文献の他，Rapoport 1996 が詳しい。

4） 各棒尺に単語は 1 つのみに見え，所有者の名前を記していると推測される［Лившиц 1984 : 265］。

5） 7 つの棒尺のうち，読みが与えられているのは 4 つのみである。

皮および粘土のテキストのうち，6点からホラズム紀元188～252年の年号が読み取れた。ホラズム紀元の元年を西暦後10～30年頃におくか，同50年代におくか両説があるが，宮殿の活動年代を西暦後3世紀頃におくことができる［Лившиц 1984: 253］。ただし，ホラズムの遺跡の年代については，なお検討の余地はあり，これを確定したものと見ることは尚早であろう。

2 「家」所属成人男性名簿

さて，木に書かれた文書のうち，断片10点を含む15点が本稿で扱う「名簿」である［Лившиц 1984: 265－277］。完全な5点（Doc. 1～5）と断片から1点（Doc. 6）の内容を以下にまず示す。最初にDoc. 2について翻字と訳を記し，他のテキストは訳のみとする（行数なども省略）[6]。人名の読みについては，とりあえずリフシツに完全に従った。疑問の余地がないわけではないが，本稿での議論にはほとんど関係しないからである。

Doc. 2：11.7×7～6 cmの本体部に長さ4 cmの柄がついた羽子板状。字は本体部両面に記される。

［表］

（1） BYT' xrk		ハラクの家
（2） xrk		ハラク
（3） βywrsr	'γt	ヴェーワルサル　来
（4） p(y?)k	'γt	ペーク　来
<		<
（5） 'BDn'		しもべ
（6） m'mk		マーマク
（7） rzm'γtk		ラズマーガタク
（8） k'k'nšk		カーカーナチャク
（9） 'prtγrywk		アーパルトグリータク
（10） 'wpnyštk		ウプニシュタク
（11） 'rtxw(t'w?)		アルタフワターウ
（12） wnynk		ワネーナク
（13） trmtk		タルマタク

［裏］[7]

6） 人名1人につき1行である。

7） 表の最下部が裏の最上部になるように，縦にひっくり返してある。

(14) t'tk タータク
(15) k'šβrzk カーシュバルザク
< <
(16) 'BDn' ZK 'NTTYH 妻のしもべ
(17) krtyw'nk カルトヤワーナク
(18) mršpk マルチパク

Doc. 1 : 36.5 × 8.5 cm, 3 欄。

ガーウナシャミの家：

ガーウナシャミ；M... 来；フリヤーフワシュ 来；ガーウファルナク 来 <

しもべ：サターヨーダク；カートファナク；ドゥシターナク；フワシャク；フラボーダク；マルティヤーサク；ミフラービールタク；フワルズバーナク；パンドカーサクγrnk[8]；サウバグダク；ベーワルサワク；ワフシュマリ <

妻のしもべ：ラズムベーワラク；ピターナク <

KNYWRTYH のしもべ：カーク；ファルナブガーワク <

BRY'TKYH のしもべ：ダルテーガーナク 来

？[9]

Doc. 3 : 29 × 9.5 cm, 3 欄。

バーナル ... チャルの家：

バーナル ... チャル；マンザート 婿 来 <

しもべ：バーグダーラク；コーシャク；ガレーナク；ハブウィタラク 来；アパーバク；アフシールバスト；ワルナク；ワニパサク 来；エーシャークダスタク 来；ナーウサールデイーク 来；フラマノーク 来；ハルダンワンド 来 <

K'ŠBKYH のしもべ：フラーガーマク 来；アーマヤーカラーマク 来；シャーティワルタク

？[10]

Doc. 4 : 25.5 × 3 cm, 表 4 欄・裏 3 欄。

スンワンの家：

スンワン；ワノーン 来；ガンチーク 来

8） 不明として訳が与えられていない。
9） 横面。YNK/BLN' と読まれているが訳は与えられていない。
10） 横面。'(m)[]γwnt と読まれているが訳は与えられていない。

しもべ：サーサーナク；メースフラタラク；シュカルワサク；ワーイワサク；ウセーナク　来；ベーワル　来；ワルトベーワル　来；ハルンワリータク　来
妻のしもべ：ワルトラズム；スーレーナク来；ダスワラーナク　来；カンチュッカル　来

Doc. 5：15 × 6 cm，2欄。
シールマーナクの家：
シールマーナク　<
しもべ：フワーンサチャク　<
妻のしもべ：ジーワータク　来　<
母のしもべ：カサチャク　来；
ノークバーグから[11)]
アルスカント[12)]

Doc. 6：15 × 6.5 ～ 4 cm，2欄。しもべの列挙の途中から始まっており，破損の跡も見えないことから，この文書の前半は，他の木片に書かれていた可能性がある［Лившиц 1984：272］。
フリータク[13)]；フワルズフラタム　来
妻のしもべ：ミフルワルト　来

【記号や語句の注】

“<” は，この形の文字で，明らかにセクション区切りの符号として用いられている。1行分のスペースが与えられるか，行間に挿入されるかで，他の字に先行あるいは後続することはない。

BYT' など大文字で転写してある語は，訓読語詞を示している。ただし，実際の文字に違いがあるわけではない。'BDn' の-n' は，で複数形語尾を示す表音補辞（送り仮名）。

11）リフシツは，本文の訳では「新しく分離した（家）から」と訳すも，注では「(集落）ノークバーグから」も可能であるとする［Лившиц 1984：267, 272, 285 n. 143］。ここでは後者を採った。

12）この語だけ裏面に，表面の字の方向とは直交して書かれている。地名を表していると考えられる［Лившиц 1984：272］。

13）フリータク xrytk という人名は「買われた（者)」と解釈することができる［Лившиц 1984：267］。従って，この人物の出自を「購買奴隷」と解釈できなくもない。しかし，そうしても，わざわざこの名が付けられるのは何故なのか，購買奴隷が珍しいのか否か，などについては不明である。また，リフシツは続けて，「しもべ」の名に確実に非イラン系のものは見られない，と述べているが，サルマタイら当時のステップ牧畜民もイラン系の言語を話していたであろうから，しもべの供給源が内部か外部かについても決め手はない。

ホラズム語の史料は少なく，とくにほとんどの訓読語詞についてはこの文書の文脈から意味を決定しなければならない。もとのアラム語単語からの意味の変化やさらには借訓の可能性も考慮する必要もある。しかし，BYT' や 'BDn' については，アラム語 byt(') 「家」，'bd(') 「しもべ，奴隷」という意味で明らかに文脈に合致しており，その解釈に問題はない。'BDn' については，リフシツは「奴隷 рабы」と訳しているが，彼自身が断っているように「従属している者」という意味をさらに限定することは文書内容からはできない［Лившиц 1984 : 267］ので，ここでは「しもべ」と訳した。もちろん「奴隷」である可能性は否定できない[14]。

'γt は「来た」が原意で，ここでは「来」としておいた。「(新しく名簿に) 載った」あるいは「(成年に) 達した」を表していると考えられる［Лившиц 1984 : 267 – 268 ; Henning 1965 : 173］。

「妻のしもべ」'BDn' ZK 'NTTYH や「母のしもべ」'BDn' ZK 'MYH (Doc. 5, Doc. 7) は訓読語詞の元のアラム語の意味および文脈から問題ない。「婿」z'mk (Doc. 3, Doc. 8) も，アラブ語 xatan「婿」に対応するアラビア文字ホラズム語 z'm'd［Togan (ed.) 1951 : facs. pt. 2］やイラン語の他の言語（近世ペルシア語 dāmād「婿」など）からみてまず問題のない訳であろう［Лившиц 1984 : 281 – 282 n. 57］[15]。

KNYWRTYH (Doc. 1) については，ヘニングは *BRY-BRTYH の崩れた形で「息子（と）娘」=「子供たち」を意味するかもしれない，という見解を出し，リフシツもそれに従って「子供たち」детей (生格) と訳している［Henning 1965 : 173 n. 27 ; Лившиц 1984 : 266, 269］。

BRY'TKYH (Doc. 1) についても同様に，ヘニングは，*BRY-'MTYH が元の形という可能性を考え「女奴隷の息子」という候補を出し，リフシツは「妾の息子」сына наложницы (生格) という訳語をあてている［Henning 1965 : 173 n. 27 ; Лившиц 1984 : 266, 269］。

K'ŠBKYH (Doc. 3) については，リフシツは訳していない[16]。

KNYWRTYH, BRY'TKYH の解釈にあまり説得力があるとも思えず，K'ŠBKYH ともども本稿では訳さずにおく。

---

14) ただし，ラポポルトやネラジクがこの文書を紹介するときは，単に「奴隷」という語を使っているので，注意が必要である［Rapoport 1991 : 514 – 515 ; Rapoport 1996 : 181 – 182 ; Nerazik & Bulgakov 1996 : 215］。

15) したがって，トプラク・カラ文書では意味が「婿」から「養子」に転化していたという可能性は，全く無視できるわけではないだろうが，高いものとはいえない。

16) Doc. 3 については，「妻のしもべ」の記載がなく，おそらく妻がいない；婿は記されるが「婿のしもべ」はない，といった点が目に付く。「K'ŠBKYH のしもべ」は，以上のことと何か関係があるのかもしれない。

【解釈】

これらの文書が，「家」成員の名簿であることは明らかである。最初に「A の家」と記され，次の行に「A」と続くのであるから，この A は「家長」であり，家は家長の名によって呼ばれていることがわかる。

家長としもべとの間には，家長の家族が記されているに相違ない（本稿では，しもべは家族には含めない[17]）。Doc. 5 では「妻のしもべ」「母のしもべ」は記載されているのに，妻や母にあたる名は記されていない。また，Doc. 1 から Doc. 4 までの 4 点の文書では，家長としもべの間の人物にはすべて「来」が付けられている[18]。「来」が上で述べたように「（新しく名簿に）載った」あるいは「（成年に）達した」を意味するならば，Doc. 1, 2, 4 のこれら「来」の付いた人名は，家長の比較的若年の息子，と考えて間違いないだろう。リフシツも，未婚か少なくとも家長の家を出ていない成人の息子，とみる［Лившиц 1984 : 267］。つまり，家族であっても妻の名は記されず，この名簿全体が成人男性のみを記載していると判断してよい[19]。

単に「しもべ」とのみ記される範疇があるということは，「家のしもべ」と「家長のしもべ」とが概念的に区別されていないことを示す。

「家」に属する成人男性全員の名簿だとすると，その用途は何だろうか。リフシツは，軍隊，予備役のため，としている［Лившиц 1984 : 267］。その可能性が高そうだが，祭儀用の名簿などという可能性も残されている。

「妻のしもべ」という表現からは「妻」は一人のみであるように見えるが，確証はできない。妾等が同居していたかどうかは情報がない（Doc. 1 はその可能性がある）。女性家族が記載されていないのと同様に，女性のしもべも存在はしたが記載されていないのは確かであろう。また，男性のしもべに家族がいるかどうか，もしいれば家族はこの家に所属しているのかどうか，いずれも不明である。

なお，調査の行なわれた年や「家」の存する場所については記されていない（Doc. 5 末尾の地名のうち少なくともノークバーグは「家」の現所在地ではないと思われる[20]）。前回の調査がいつ行なわれたのかの情報もない。木片のサイズは，Doc. 5 と Doc. 6 がほぼ一致する他は，ばらばらである。

---

17) 擬制的な血縁関係が結ばれている可能性はもちろんあるが，本稿では「しもべ」の記述がセクション区切り符号で区切られていることを重視した。また，「妻のしもべ」と家長の妻との間に擬制的な血縁関係が結ばれるとはやや考えにくい。

18) ただし，断片の Doc. 11 では，(‘BD)[n’] の前行は，’γt で終わっていないようだ。しかし，(‘BD)[n’] の読み自体確かではない。また 3 行しか残っておらず文書の全容も明らかでない。

19) もちろん，「成人」が何歳からかは，わからない。

20) Doc. 5 のシールマーナク家の成員の少なさは，引っ越してきて間もないからかもしれない［Лившиц 1984 : 267］。

【特徴】

以上のように解釈したこれらの名簿に見られる特徴をいくつか挙げてみよう。

まず，誰でも気づき，かつ歴史的にも最も重要に思われるのは，「家」の成員の中でしもべの占める比率が非常に高い，ということである。家長を含む家族としもべとの比を示すと，Doc. 1で4：17；Doc. 2で3：12；Doc. 3で2：15；Doc. 4で3：12；Doc. 5で1：3である[21]。男性家族の3倍以上の男のしもべが「家」に存在している。もちろん，この文書がどのような階層を対象にしているか全くわからないから，古代ホラズム社会全体に敷衍するのは無理かもしれない。家長としもべが同じ名簿に載せられていること，および現存するテキストでは家長に何の称号・職種が付けられていないことは，家長の身分があまり高くないこと，あるいは特殊な職能集団ではない農民や牧畜民であること，を示しているのかもしれない。しかし，これはあくまで可能性に留まる。それでも，しもべの高比率という傾向が欠損のない名簿テキスト5点すべてから見いだせること，およびDoc. 1～4のような男子成員15名を越える大規模な家だけでなく，Doc. 5にみえる男子成員4名の小規模な家でも観察できること，は強調されてよい。また，「妻のしもべ」が別個に存在することも見落としてはならない。

もう一つ関心を惹く特徴は，家族構成についてである。完全な5点のうちDoc. 2, Doc. 4の家では，家長の息子がしもべを保有していたとは考えられず，未婚か仮に既婚としても結婚間もないのではないか，と想定できよう。つまり，この2テキストからは核家族（単純家族）あるいはそれに準ずる家族と多数のしもべからなる家，という姿が想定される。Doc. 5の家族は，家長の母が含まれる拡大家族であるが，家長の父の名はなく，多核家族ではない。シールマーナクの父の死後，母がシールマーナクの家に入った，という可能性が高そうである。Doc. 1は，KNYWRTYH, BRY'TKYHの意味次第であるが，やはり多核家族ではなく，核家族に個人単位で親族（妾なども含む）が加わる拡大家族であったのではないだろうか。個人単位で加わる親族は，Doc. 5では女性であり，Doc. 1でも男性親族である可能性は低いものと思われる。残るDoc. 3は「婿」がいるので確かに多核家族であるが，大規模なものとは言えないし，他の家とは構成がかなり異なるので，この家のみの特殊事情があったのかもしれない[22]。わずか5テキストからの検討ではあるが，核家族およびそれを個

21）「しもべ」の多さだけは，既にいろいろな箇所で指摘されている［Лившиц 1984：266－267；Rapoport 1991：514；Rapoport 1996：182；Nerazik & Bulgakov 1996：215］。

22）家族世帯に関する用語は，ラスレット1992に従う。したがって，「拡大家族」は「核家族（単純家族）に他の親族が個人で加わった場合」のみを指す［ラスレット1992：42］。ただし，本稿では「単純家族」のかわりにもっぱら「核家族」という用語を用いた。婿が記されるDoc. 3については，注16に一部述べたように，5テキスト中唯一「妻のしもべ」が記されない，Doc. 5とともに息子が記されない，などの特徴がある。婿の相手の娘の年齢がきわめて低い可能性や，婿の身分が低い（たとえば「しもべ」）可能性も考えられるが，もちろん詳細は不明。

人的に拡張した小規模な拡大家族が，ここでの標準的なモデルとして考えられよう。さらに，先に述べたように，家長の息子（と推定される人）たちにみな，「来」＝「(新しく名簿に)載った」あるいは「(成年に）達した」という形容が付いている[23]。このような記述は，既に結婚した年長の息子たちは，別の世帯に数えられているということを強く示唆する[24]。

以上から，「核家族・小規模拡大家族と多数のしもべからなる家」，より詳しくはおそらく「年長の息子が独立していく核家族・小規模拡大家族と多数のしもべからなる家」，が名簿テキストから導き出せる標準モデルとして浮かび上がってくる。もちろん母数が少なく，意味不明の語もある中では，それほどの確信をもって言える主張ではないが，ともかく考察の出発点にはできるだろう。

しもべについては，Doc. 1, Doc. 2 では「来」が付く人数が少ないのに対し，Doc. 3, Doc. 4 では半数以上が「来」が付いている。説明の一つとして，たとえば，後者では息子の独立に伴って，しもべも贈与したので新たに補充した，という可能性がある。他方，Doc. 1, Doc. 2 のしもべは流動性が低いと言える。

II「多数のしもべからなる家」は遺構に反映されているか

以上のような特徴は，テキストに書かれた情報のみから導いたものである。さて，ホラズムでは非常に多くの遺構が調査発掘されてきた。上で推察したような「家」の姿に合致するような遺構を探し当てることはできるだろうか。このような検討は既にネラジクが行なっているが，彼女の検討はこの文書に関する 1984 年以前の散発的な成果を利用できたのみであり，家長の息子たちにみな「達した」(あるいは「載った」) という語が付いている事実を利用できず，したがって不十分なものである [Неразик 1976 : 213－219 ; Неразик & Рапопорт 1981 : 139－140]。リフシツは，慎重にもそのような考察には歩を進めてはいない [Лившиц 1984 : 267]。

名簿における「家」は居住形態を反映している，とやや強引に仮定した上で，トプラク・カラ市街部，農村・城屋敷，牧畜民地域の順に検討してみよう。この仮定の下で，以下では「家」を世帯と呼ぶことにする。予め結果を述べておくが，なんらの説得力ある結論にも達

---

23) リフシツはもちろん指摘している [Лившиц 1984 : 268]。しかし，注 2，注 3 で挙げた文献でこのことに触れてあるものはない。

24) もちろん，独立した息子は，親の隣に住んでいるのかもしれない。そもそも，この文書の「家」が，居住単位のものか（＝世帯），労働の場としても含むのか（通いのしもべなどが含まれるか），それとも書類上の概念で，両者とも一致しないか（＝現在の日本の戸籍），どれにあたるか判断する材料がない。私は，居住単位のものととりあえず考えているが，しもべの中に通ってくる者がいた可能性は十分にあるだろう。なお，結婚せずとも息子が独立して，一時的に他の家にしもべとして勤める，という可能性もゼロではない。

しえなかった。

1 トプラク・カラ市街部

トプラク・カラ市街部は300 m四方強の面積なので，1ヘクタールあたり200～300人を見込んでも2000～3000人程度にしかならない。もし各世帯の構成が，Doc. 1, 2, 3, 4に見られるように多数の成員から成るものと強引に仮定すれば，市街部の総世帯数は100に満たないことになる。名簿テキストに地名が書かれていないことの説明はいろいろと可能だが，もっとも単純なものとして，王宮の文書保管庫のごく近くの世帯を記録していたため，というのが挙げられる。木片のサイズがまちまちなのも，登録作業が小規模であったことの現われ，とみればよい。そもそも貴重な材料である木に記録しているということは，全ホラズム全世帯対象のような大規模な作業でなかった，と考えられなくもない。

もちろん，上記の点一つ一つに反論は可能である：地名が書かれていないのは，年号が書かれていないのと同じく，地名の書かれた引出し・棚に整理して収納されていたから；サイズは登録調査時期や地域によってさまざまに異なっていた可能性がある；全ホラズムでも一部の階層のみを対象にすればそれほどの文書量にはならないだろうし，そもそも崩壊した文書庫にどれほど文書が保管されていたのかはわからない。とはいえ，これらの点は，名簿がトプラク・カラ市街部の世帯を表しているという仮説に若干有利に働くように思える。

さて，トプラク・カラ市街部の区画（各100×40 m）のうち2つが，中央大通り側（北東側）1/3ほどにわたって発掘されている。王宮内城に近い北西側の区画aは住居でなかったが，一つ南東よりの区画6は，航空写真などから予想されていたように，ぎっしりと建て込んだ集合住宅をなすことが裏づけられた。少なくとも15室以上が一つの複合家屋をなし，さらに壁を接して隣接する南西側部分も同様の多室構造が続いている［Неразик & Рапопорт 1981: 21－22］。ただし，全時代にわたって同じ構造が続いたわけではなく，部分的に試掘されただけの最も古い第I層（後2～3世紀に比定）ではこのような大家屋構造は見られず，第II層前半（第II層・第III層が4～6世紀とされる）で集合家屋は最も発達し，第II層後半には衰退が見られ，第III層にいたると大家屋は分解してしまうという［Неразик & Рапопорт 1981: 14, 20－22, 30－31, 36－37］。

ネラジクは，第II層前半の集合大家屋を名簿テキストの大世帯の住居とみて，市街の1区画に3～6の大世帯が入ると考え，その合計が1区画200～250人くらい，住居用区画が8ないし10あるので市街部の総人口は2000～2500人と計算している［Неразик & Рапопорт 1981: 139－140］[25]。

しかし，このような街区内に建て込んだ集合家屋住居は，「多数のしもべをともなう世帯」

25) ラポポルトが「（区画には）各々に3ないし6世帯の住居を伴う」［Rapoport 1996: 162］と述べるのは，ネラジクのこの推論に基いたもので，発掘の直接的な成果ではない。

という条件には適合するかもしれないが，「年長の息子が独立していく核家族・小規模拡大家族」の居住を反映しているとは少し想定しにくい。たとえ名簿テキストの世帯が実際にトプラク・カラ市街部に居住していたとしても，「核家族・小規模拡大家族と多数のしもべからなる世帯」という形態自体は，トプラク・カラで発生したものではなく，どこか他の地から持ち込まれてきたもの，と考える方が自然ではないだろうか。

2 農村・城屋敷

年長の息子が結婚して独立の世帯を構えることは，ヨーロッパ家族史で「ネオローカリズム」と呼ばれ，ヨーロッパ西部および北部で広く見られる［ラスレット 1992：10－11, 50, 60－64］。モンゴル遊牧民などの末子相続（末男子相続）制度と直結させて考える人がいるかもしれないが，「長子相続」とも併存する［若尾 1989：27－34］[26]。このような世帯が，ホラズム農村地帯に存在していたとしてもおかしくはない。

ネラジクは，20～40人の世帯が暮らすには10～15の部屋が必要であるとみて，ほぼ同時代の遺構の中から，多室の大家屋であるアヤズ・カラ Ayaz-kala（トプラク・カラの近く）の1号家屋やトゥルパク・カラ Turpak-kala（アム・ダリヤ左岸）の5号家屋や9号家屋を名簿テキストの世帯が居住する候補に挙げる［Неразик 1976：213－219］。たとえば，トゥルパク・カラ9号家屋は居住部分の面積が920 m^2 で大世帯を収容するのに不足はないだろう。しかし，ここでもこのような多室の固定家屋が「年長の息子が独立していく核家族・小規模拡大家族」の居住にそぐうのか若干の疑問なしとしない。ただし，まわりの空間的な余裕は，トプラク・カラ市街よりは遙かに大きいので，独立した息子が親の近くに居を構えることも市街部よりは容易であろう。

ところで，これらの大家屋は防御設備が発達していない（アヤズ・カラの家屋は城砦のすぐ近くに位置する）が，ホラズム地域に数多く見られるのは，城 замок や丈夫な囲壁に護られた屋敷 усадьба の遺構である。テシク・カラ Teshik-kala 城やヤッケ・パルサン Yakke-parsan の4号屋敷，5号屋敷などを挙げることができる［Неразик 1976：58－66］。これらの城屋敷は「多数のしもべをともなう世帯」には矛盾なくあてはまるが，時代的には早くても4～5世紀，多くは7世紀以降，とされており，トプラク・カラの名簿テキストの時代より遅れる可能性が高い。しかも，近年の研究はこの年代をさらに下がらせる傾向にある[27]。したがって，名簿テキストの世帯居住候補としては弱い。ただし，旧ソ連圏の文献で

26） 19世紀ドイツでも，ハノーファー法のような長子相続が支配的ではあって，末子相続はオスナブリュックやヴェストファーレンの一部に限定されており，また同時代者の意見は各々の相続の支持者に分裂している，という［若尾 1989：31］。なお，末子相続は日本などでも認められる制度であり［竹田 1996］，遊牧民に限られるものではもちろんない。

27） ヘルマンは，6～7世紀とされてきたテシク・カラの年代について，9～10世紀の可能性を指摘している。彼女は，地域は異なるがメルヴの同様な建物（ケシュク köshk）である大小クズ・↗

は，トプラク・カラ宮殿の時代は古代，城屋敷が支配的な景観になる時代は初期中世，としてその相違が強調される傾向にある［トルストーフ 1981：125－128］。防御の弱い大家屋と堅固な屋敷との繋がりはさらに研究する必要があるだろう。

3 牧畜民地域

息子が独立していく世帯モデルは，もちろん，主要な財産を分割しやすく移動しやすい動産として保有する牧畜民[28]のものとして説明することもできる。

ただし，牧畜民は痕跡を残しにくく，世帯構造を遺構で確認するのは困難を伴う。アム・ダリヤ左岸分流のサルカムシュ低地クユサイ Kuyusai の定着牧畜民の住居址でも，そこから世帯や家族の構造を知るのは容易ではないだろう［Ваинберг 1979：9－25, 54－55］[29]。テントの居住者についてはそもそも生活址を検出するのが難しい[30]。

牧畜民の社会構造を知る際に良く利用されるのは埋葬遺構である[31]。しかし，名簿テキストにみえる世帯がはたして埋葬遺構に反映されるのか。しもべが家長あるいは妻他の主人に一生従属しているかどうかがまずわからない。「来」がつくしもべが Doc. 1, Doc. 2 で少ないから，長期間従属している可能性は高そうであるが，しかしそれが埋葬に反映されるかどうかはまた別問題である。

サルカムシュ低地の当該時期前後の墓を見ても，たしかにサカル・チャガ Sakar-chaga 第1墓群では，墓道の付いたものの方が構造的に立派である。しかし，墓道なしのほうの墓も，家族が一つのクルガンに入っていると覚しき例が多く，しもべの墓とみるには副葬品が豊富なものも少なくない［Яблонский 1999：Табл. 1－3；Рис. 5－12］[32]。Яблонский 1999 所収の墓群を見ても，「核家族・小規模拡大家族と多数のしもべからなる家」にぴたりと当て嵌まりそうな例は見つけられなかった[33]。

↘カラ Kyz-kala の年代について8～9世紀としている［Herrmann 1999：69－74, 79－88］。

28） ヤブロンスキーは，古代の中央アジア牧畜民の生態についてのアキシェフの研究を次のようにまとめている。中央・西カザフスタンでは，遊牧民すなわち水平的に移動；東カザフスタン，セミレチエや天山，パミール・アルタイの山麓や谷では，半遊牧で垂直的に移動；大河のデルタやオアシスの辺縁では基本的に定着牧畜［Yablonsky 1995：196］。ホラズムは最後の例にあたり，ヤブロンスキーもアム・ダリヤ・サカは半定住なしい定住生活を送っていた，とみなしている［Yablonsky 1995：229］。したがって本稿では，遊牧民ではなく，牧畜民という呼称を用いておく。

29） この遺跡の年代は前1千年紀で，トプラク・カラより古い。

30） なお，古代ホラズムでは，壁で囲われれた内部に固定建築物がほとんど検出できない例がいくつかある：アヤズ・カラ1号城砦［加藤 1996：37］；トプラク・カラ都城外の巨大な囲い（本稿 I-1 参照）。未完成とみる他に，テント利用を考慮しても良いのではないか。

31） たとえば，護は，突厥碑文の奴隷等をアルタイ地域の埋葬から実証しようとしている［護 1967：131－139］。

32） ヤブロンスキーも，ホラズムの例は，墓道つき合葬墓に社会的地位が高い者が埋葬されていることの証にはならない，と述べている［Яблонский 1999：103, 321－322］。

33） むしろ，前1千年紀前半初期サカ時代の墓の方が，家長としもべの差と解釈できるような例を↗

名簿テキストの描く世帯を多少なりとも連想させてくれるのは，クニャ・ウルゲンチの40 km 西に位置するチャシュ・テペ Chash-tepe である。1963 年に一部試掘調査された区域では，105 × 68 m の囲い（壁は幅 12 m，高さ 1.8 m）の内部と外部に 10 個ほどの石積構造を持つクルガンがあり，周囲に 180 ほどの塚が存在する。ただし，出土品は非常に少なく何も出ない塚もあった（出土品は 4 世紀頃を示す）。チャシュ・テペ全体では同様の囲いが20 近くあるようである［Рапопорт & Трудновская 1979］。クルガンと塚との関係が家族成員としもべとを表しているという可能性はとりあえず否定はされないだろう。しかし，出土品がきわめて乏しいので，家族世帯の具体的な構造を知ることは困難である。

4　遺構との比較：小結

当然予測できたことであるが，名簿テキストから想定される「家」，年長の息子が独立していく核家族・小規模拡大家族と多数のしもべからなる世帯，に合致するような遺構を確証を持って見いだすことはできなかった。それどころか，どの候補も，可能性が否定されるわけではないが，あまり当て嵌まりそうにないように思える。

結局，このような世帯モデルの実例を，他にあまり知らないため，憶測から先にはなかなか進めないのである。あるいは，想定したモデルそのものに無理があったのかもしれない。

ホラズムではたいへん広範囲に調査がされてきたので，名簿テキストの示す家と同種の構成を持つ家・世帯の遺構は，既になんらかの形で我々の目に触れている可能性が高い。プランのみでなく遺物を詳細に検討し，小規模家族と多くの奉公人が同居するヨーロッパ西部の例［ラスレット 1992］[34] などと比較することによって，同定することは可能になるかもしれない。

おわりに

トプラク・カラ出土名簿テキストに示された「家」の姿は，古代ギリシア・ローマ社会を相対化する際に有用であろう。「多数のしもべを伴う家」がそれほど稀ではない社会，は想定されているよりも多くの地域・時代に見出されるのかもしれない。また，この家構成が牧

↘出すことができるかもしれない。雪嶋 1999 : 184 – 188 参照。

34）ラスレットは，1 人の独身貴族と 49 人の奉公人からなる世帯の例を挙げている［ラスレット 1992 : 20］。ラスレットの以下の指摘は古代ホラズムの家を考える際にも大いに参考になる：複合的な世帯が高い比率で，あるいは広範に長期にわたって見られたところでも，単純家族世帯が欠如したということはほとんどなく，少数とはいえ重要な部分をなしていたこと；大規模家内集団が親族複合集団であるとは想定しえないこと；世界中のいかなる地域においても過去においては大規模世帯であったという考えはほとんど完全に誤った事実無根な幻想であること［ラスレット 1992 : 19 – 21］。

畜民由来のものとすれば，他の地域時代の中央ユーラシア牧畜民における「家人」と比較検討することも課題となってくる。

ホラズム史の中で考えると，このような家構成が次の時代，城屋敷が林立していく時代，の家構成と断絶があるのか連続するのか研究することが必要になってくる。古代と初期中世との隔絶というソ連時代の定説を批判的実証的に検証していかなければならない[35]。ホラズムのみならずセルジューク朝期くらいまでの中央アジア西部全体で，城屋敷にどのような人々が住み，働いていたのかという問いは，ディフカーンと呼ばれる人たちの家構成などにも関わる重要な問題であり，それはイスラーム世界の奴隷軍人制度にもおそらく繋がってくるであろう[36]。

＊ 本稿は，日本オリエント学会第44回大会（2002年10月19－20日東北大学）における口頭発表「古代ホラズムの奴隷とイエ ―― 中央アジア史の視点から ――」に加筆したものである。

参考文献

ТХАЭЭ : Труды хорезмской археоло-этнографической экспедиции. Москва.

Henning, W. B. (1965) The Choresmian Documents, *AM* n. s. 11 (2), 166－179.

Herrmann, G. (1999) *Monuments of Merv : Traditional Buildings of the Karakum*, London.

Итина, М. А. (ed.) (1979) Кочевники на границах Хорезма. ТХАЭЭ 11.

Лившиц, В. А. (1984) Документы. In : Рапопорт & Неразик 1984 : 251－286.

MacKenzie, D. N. (1990) *The Khwarezmian Element in the Qunyat al-munya*, London.

Неразик, Е. Е. (1976) Сельское жилище в Хорезме (I-XIV в. в.). ТХАЭЭ 9.

Nerazik, E. E. & P. G. Bulgakov (1996) Khwarizm. In : Litvinsky (ed.) *History of Civilizations of Central Asia 3 : The Crossroads of Civilizations : A. D. 250 to 750.* Paris, 207－231.

Неразик, Е. Е. & Ю. А. Рапопорт (1981) Городище Топрак-Кала : Раскопки 1965－1975 гг. ТХАЭЭ 12.

Rapoport, Y. A. (1991) Chorasmia I. Archeology and Pre-Islamic History, *EIr* 5, 511－516.

35) 周辺地域との関係も無視できない。13世紀のアラビア文字ホラズム語では，奴隷は *hwn（<フン）という異民族を指す語に由来する形が使われている；在証される形は，h(w)n'n "slave-girl", hwnz'dk "slave-child" [MacKenzie 1990 : 112]。いつからこの語が奴隷の意味で使用され始めたかはもちろん不明。また，突厥支配期以降の貨幣の一部（タイプ ΓV，ΓVI）にはホラズム文字だけでなくソグド文字の銘も加わり，中央アジア西部の文化地図の変化を反映している [Ваинберг 1977 : 61－64, 152－161, Табл. VI-VII ; ルトヴェラーゼ 1999 : 61 No. 27]。

36) イスラーム世界の奴隷軍人と中央アジアとの関わりについては，清水 1999 : 230－236 参照。

Rapoport, Iu. A. (1996) The Palace of Topraq-Qal'a, *Bulletin of Asia Institute* n. s. 8 (1994), 161 - 185.

Рапопорт, Ю. А. & Е. Е. Неразик (1984) Топрак-Кала : Дворец. ТХАЭЭ 14.

Рапопорт, Ю. А. & С. А. Трудновская (1979) Курганы на возвышенности Чаш-тепе. In : Итина (ed.) 1979 : 151 - 166.

Togan, Z. V. (ed.) (1951) *Horezmce Tercümeli MUQADDİMAT Al-ADAB*, İstanbul.

Ваинберг, Б. И. (1977) Монеты древнего Хорезма. Москва.

Ваинберг, Б. И. (1979) Памятники куюсайской культуры. In : Итина (ed.) 1979 : 7 - 76.

Yablonsky, L. T. (1995) Chapter 13. Written Sources and the History of Archaeological Studies of the Saka in Central Asia ; Chapter 14. The Material Culture of the Saka and Historical Reconstruction. In : Davis-Kimball, J., V. A. Bashilov & L. T. Yablonsky (eds.) *Nomads of the Eurasian Steppes in the Early Iron Age*. Berkely, 193 - 239.

Яблонский, Л. Т. (1999) Некрополи древнего Хорезма. Москва.

加藤九祚（1996）第Ⅰ部　古代ホラズム文明の跡を訪ねて『古代ホラズムの研究』(『シルクロード学研究』2）（財）なら・シルクロード博記念国際交流財団，1 - 95.

清水和裕（1999）マムルークとグラーム　佐藤次高他『岩波講座世界歴史 10　イスラーム世界の発展』岩波書店，223 - 245.

竹田　旦（1996）末子相続　比較家族史学会（編）『事典　家族』弘文堂，687.

トルストーフ，S. P.（加藤九祚訳）（1981）古代ホレズム　ヤクボーフスキー他著（加藤九祚訳）『西域の秘宝を求めて』新時代社，第 2 版，89 - 162.（初版 1969）加藤 1996 : 69 - 95 に再録.

マッソン，V.（加藤九祚訳）（1970）『埋もれたシルクロード』岩波書店.

護　雅夫（1967）第 1 編第 3 章　古代チュルクの社会構造　護雅夫『古代トルコ民族史研究』1，山川出版社，94 - 160.

雪嶋宏一（1999）第 3 章 4　アラル海沿岸の初期遊牧文化　藤川繁彦（編）『中央ユーラシアの考古学』(『世界の考古学』6）同成社，172 - 188.

ラスレット，ピーター（酒田利夫，奥田伸子訳）（1992）『ヨーロッパの伝統的家族と世帯』リブロポート.

ルトヴェラーゼ，E. V.（久保一之訳）（1999）古代・初期中世トランスオクスィアナにおける貨幣流通：独自の硬貨製造をめぐって『西南アジア研究』50，48 - 64.

若尾祐司（1989）近代ヨーロッパの家族と親族　二宮宏之他『シリーズ世界史への問い 4　社会的結合』岩波書店，17 - 45.

（東海大学文学部）